様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０２６７

研究課題名（和文）児童・生徒の精神的健康向上を目指す予防的メディアリテラシー教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Preventive Media Literacy Education Program aiming at Mental Health Improvement for Children

研究代表者
藤川　大祐（FUJIKAWA, Daisuke）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：５０２８８４２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：ネットいじめの問題は教師・保護者にとって可視性が低く、介入は難しいものである。そこで予防がより重要になる。本研究ではネットいじめが深刻な問題になる前段階の「ネットいじめの芽」に焦点をあてて、子どもたちの深刻度の認識や対処の自信、対処行動を調査した。また「ネットいじめの芽」のような状況において傍観者の行動は学級風土にどのように影響されるかも調査した。
最後に、これら調査結果に基づき、クラスの雰囲気が傍観者の行動に影響を与えることを学ばせる予防的教育プログラムを開発した。そしてこの映像教材を用いた道徳の授業を千葉県柏市の公立中学校１年生３クラスで実施した。

研究成果の概要（英文）：Cyberbullying intervention is often difficult because cyberbullying problems are invisible to many parents and teachers. Thus, prevention is more important. The present study focused on an incident antecedent to cyberbullying trouble and examined its perceived severity, confidence to deal, and coping behaviors among children. In addition, we also investigated how classroom climates influence bystanders' behaviors. Finally, based on research findings, preventative educational program was developed. We delivered this program to three junior high school classrooms in Kashiwa city, Chiba as a moral education class.

研究分野：教育方法学

キーワード：ネットいじめ　メディアリテラシー　いじめの芽　傍観者

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、スマートフォンの急速な普及により、子どもたちが長時間使用するスマホ依存の問題やコミュニケーションアプリ上での友人関係のトラブルなど教育現場で問題視されていた。学校も家庭も、子どもたちにインターネットおよび携帯電話との適切な付き合い方をうまく指導できていない中で予防的教育の実施が求められていた。このような現状を踏まえ、小・中・高校生と幅広い年代の児童･生徒を対象に、インターネット･携帯電話の使用実態と意識、使用に関する諸問題を調査し明らかにすることを目的とした。そして、その基礎的知見に基づき予防的メディアリテラシー授業プログラムを構築し、教育現場で活用できるよう広く啓発することを目指した。

２．研究の目的

インターネット・携帯電話にまつわる子どもたちのトラブルは多岐に渡るが、本研究ではネットいじめの予防として深刻な問題に発展する前の「いじめの芽」に着目した。いじめ防止対策推進法の制定後，各自治体や学校は予防のための様々な取り組みを行ってきている。しかし、子どもたちの友人関係におけるグループダイナミクスは複雑である。いじめはどこからともなく突然に発生するものではなく、なにかしらのきっかけがあり、子ども達は日々大小様々なトラブルを経験していると考えられる。そのきっかけ，すなわち「いじめの芽」の段階で適切な介入ができれば大きないじめトラブルに発展することを防ぐことができるであろう。そこで、この「いじめの芽」をどの程度子どもたちが経験しているか、また傍観者の立場にある子どもたちが、状況の深刻さを認識し、どの程度対処の自信を持ち、どのような対処行動をとるかを明らかにすることを目的とした。そして、それらの性差と発達段階の違いにおける差を明らかにすることを調査した（研究１）。

そして、研究２では傍観者の役割と学級の風土に着目した。集団内で起きるいじめの芽の問題理解においては，近年傍観者の役割が重視されている。なぜなら多くのいじめ場面において，加害者・被害者だけなく傍観者も存在しており (ABBOTT and CAMERON, 2014)、自分が直接いじめに関わりがなくても、他人がいじめられているのを目撃する、悪い雰囲気の教室にいること自体が大きなストレスとなり、適応の問題に発展するリスクがあるからだ (RIVERS et al. 2010)。そこで、 ネットいじめの芽の場面において傍観者である児童生徒がどのように行動するか、そしてその際，同じ場面でも周りのクラスメイトの反応の違いによって行動の差が出るか調査し、個人要因だけでなく学級風土の影響を明らかにすることを目的とした。

最後に、これらの研究結果に基づき、ネットトラブルの予防的教育プログラムを開発し、教育現場で幅広く実践することを目指した。

３．研究の方法

研究１：関東地方の公立小学生(209 名)・中学生(210 名)の計 419 名(男性 203 名、 M = 12.43 歳、 SD = 1.07)を対象に質問紙調査を行った。まず「ネットいじめの芽」となるような状況を２場面呈示し、それらにおける自身の経験、深刻さの認識、対処の自信、取りうる対処行動について質問した。そして、ネットいじめの芽の状況における深刻度の認識，対処の自信と各対処行動は，男女別・学校別（小学生 v.s.中学生）に比較をするため，それぞれ t 検定を行った.

研究２：関東地方の公立小学生(221 名)，中学生(343 名) ，高校生(355 名)の計 919 名(男性 425 名，M = 14.13 歳，SD = 2.35)を対象にシナリオ法の質問紙調査を行った。

予備調査として現役の教師や擁護教員４名から「ネットいじめの芽」となるような状況を自由記述で回答してもらい、それらを基にシナリオを作成し呈示した。シナリオでの出来事には、文脈要因の差を検討するために、異なる２つクラスメイトの反応場面を設定した。１つはクラスのリーダー的存在がその状況を支持している、もう一方はクラスメイトが不安に思っている状況である。 そして、この呈示された出来事が起きた際の行動とし 14 の対処行動を示し、「絶対にそうしないと思う(1)」～「きっとそうすると思う(5)」の 5 件法でたずねた。そして、同一状況にあたる２場面の文脈要因を比較するために，データの平均を算出し，小中高それぞれで t 検定を行った.

授業プログラム開発：研究１及び研究２の成果に基づき、独自の動画教材を作成し、この動画教材を用いた授業プログラム「私たちの選択肢」を開発した。動画プログラムは、ネットいじめを含むいじめが始まった状態の中学校の学級において、ネットいじめを止めるために SNS に書き込みをするか否かを迷う主人公の模様を約 10 分の実写ドラマで描写した後、視聴している学級の児童・生徒に自分が主人公の立場だったらどちらの選択肢を選択するかを問い、学級においてそれぞれがどのような選択をしたのかを共有してもらう。そして、視聴している児童・生徒が各選択肢を選択した比率に従った確率で、その後の物語の展開を決める。

（教材中の SNS 画面）

最後に解説動画において、観衆や傍観者の立場にある者がいじめを止めるための何らかの行動をとればいじめを止められる可能性が高くなること、そして学級の雰囲気が観衆・傍観者の立場に
ある者の行動に大きく影響を与えることが研究で明らかになっていることを示し、学級の一人一人がいじめを止めるためにできることがあることについて学んでもらえるようにしている。

（教材中の解説画面）

４．研究成果

研究１：自分自身に起きたネットいじめの芽の経験を「いつもある」「よくある」とした回答割合は少なかったものの，小学生女子の 10.5%，中学生女子の 13.6%は「時々ある」と回答していることから、大きなネットいじめトラブルに発展する前の芽の段階を少なくない児童生徒が経験していることが明らかになった。友達に対して行った経験に関しても、男子よりも女子の方が小中学生ともに「よくある」「時々ある」との回答割合が多かった。対処行動の性差では，女子の方がより状況確認や大人からの援助要請といった間接的な行動を取っていた。

学校間の差においては，小学生は中学生より、いじめの芽に対して深刻さを認識し、より適切な対処行動が取れていた。しかし、学生中学生間に対処の自信についての差はないことから、深刻さは認識し、より適切な対処行動はとれていても、その行動が問題解決につながるという実感は得難いことが示唆された。

研究２：行動毎の比較では，「B さん（ネットいじめの芽の被害者）をなぐさめる」「B さんのそばにいる」「誰かとやめるように言う」「一人でやめるように言う」「何もしない」「ただ見ている」「見て見ぬ振りをする」において小中高校生全ての段階で文脈間の有意な差がみられた。

一方，「面白がる」「周りに同調する」においては中学生のみ文脈間の有意差が認められた．また，「先生にいう」「B さんと関わらないようにする」においては小学生のみ文脈間有意差が見られなかった。

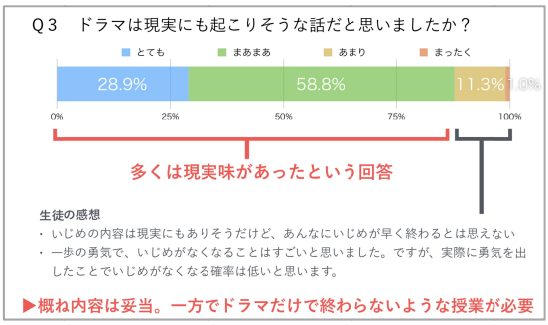
これらの結果から傍観者の解決方略には「いじめの芽」の状況そのものよりも、学級の雰囲気が影響することが明らかになった。いずれも，クラスメイトがその状況に対して不安に思っている状況において積極的な解決方略を選択していた。またそれらの解決方略の差には小中高の発達段階においても差が見られ、小学生は中高生よりも学級の反応に影響されにくいことも明らかになった。

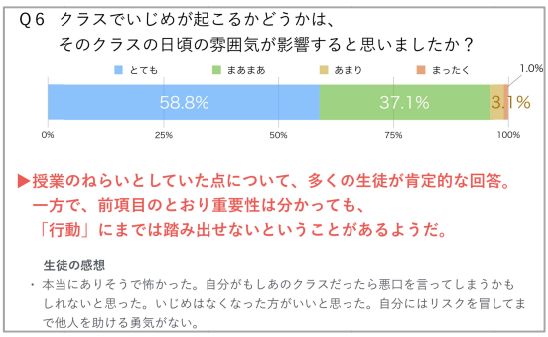
傍観者のエンパワーにはアサーショントレーニングが有効との先行研究があるように(ABBOTT and CAMERON, 2014)，様々な形で起きるいじめの芽の状況に対し，自分が正しいと思うやり方を信じて行動し，自分の考え，気持ちなどを率直に，正直に，その場の状況にあった適切な方法で述べることができるようトレーニングすることは重要な予防の取り組みとなる。また、いじめ予防の教育においては，道徳的な指導だけでなく，直接的なスキルトレーニングなどが必要であろう。例えば，傍観者は正義の味方のように加害者に立ち向かわなくても，被害者に声かけをする、励ますなどのサポーティブな姿勢を見せることだけでも被害者のダメージ軽減に効果的だとの先行研究もあることからも（PADGETT and NOTAR, 2013)、自分の小さな働きかけが大きな力になることもあることを伝え、問題解決や援助のスキルトレーニング、ピアメディエーションの要素を予防教育に取り入れることが生徒の効力感向上にもつながるであろう。

そこで下記のような授業プログラムを開発し、教育現場で実践することにより、ネットいじめの芽の段階で適切に予防ができるような取り組みを試みた。

授業プログラム開発：上記の研究結果を踏まえ、教育現場で実践できるプログラムを開発した。2017 年 3 月、千葉県柏市内の公立中学校 1 年生 3 学級にて各 1 時間（1 単位時間は 50 分）の授業を実施し、基本的に計画通りに授業を進行できること、授業を受けた生徒たちがおおむね肯定的に授業の内容を受け止めたことを確認した。授業後のアンケートで、87.7%の生徒が「ドラマは現実に起こりそうだ」とし、95.9%の生徒が「クラスでいじめが起こるかどうかは、そのクラスの日頃の雰囲気が影響すると思う」としている。なお、研究成果の社会実装として、本授業プログラムについては、2017 年度より柏市教育委員会によって柏市内全中学校の 1 年生全学

級において実施されることが決まっていることに加え、希望する学校等については教材及び指導案を配布することが予定されている。





本研究の全体を通して、調査や授業実施に協力くださった学校や関係の教育委員会をはじめ、授業プログラムの作成等に協力してくださった谷山大三郎さん（ストップイットジャパン株式会社）、三戸雅弘さん（平成 28 年度千葉大学教育学部委託研究生）、阿部学さん（敬愛大学）等、多くの方にご協力をいただいた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

<u>藤川大祐・青山郁子・五十嵐哲也</u>、ネットいじめの芽における小中高校生の傍観者行動と文脈要因の違いにおける差の検討、日本教育工学会第 32 回全国大会（大阪大学）、2016 年 9 月 18 日

〔その他〕
ホームページ
http://dfujikawa.my.coocan.jp/
（研究代表者ホームページ。授業プログラム「私たちの選択肢」関連情報を掲載している。）

６．研究組織
(1)研究代表者
藤川大祐　（FUJIKAWA Daisuke）
千葉大学　教育学部・教授
研究者番号：50288429

(2)研究分担者
青山郁子　（AOYAMA Ikuko）
静岡大学　グローバル企画推進室・特任准教授
研究者番号： 60586808

五十嵐哲也（IGARASHI Tetsuya）
名古屋大学　心の発達支援研究実践センター・准教授
研究者番号：90458141